



TITLE:

# 「塔」で語られるレッドハンラハンの物語

AUTHOR(S):

西谷, 茉莉子

---

CITATION:

西谷, 茉莉子. 「塔」で語られるレッドハンラハンの物語. Zephyr 2009, 21: 18-36

ISSUE DATE:

2009-03-27

URL:

<https://doi.org/10.14989/98045>

RIGHT:

# 「塔」で語られるレッドハンラハンの物語

西谷 茉莉子

## 序

イエイツの作品の中には、過去の自作への言及があったり、彼自らが生み出したキャラクターが登場したりする。このような、彼の作品間の依存度の強さは、早くから指摘されてきた。例えば、ダニエル・ホフマン (Daniel Hoffman) は、「イエイツの詩は、彼が好んで使った表現によると何本もの同じ糸で織られているので、詩から詩へと、時には散文を通じて、一本の糸をたどっていくことが助けになる」と述べている (Hoffman 17)。そのため読者は、イエイツのある詩を読むときに、彼の他の詩にまつわる知識を求められることがあるだろう。しかし、その作品同士を結ぶ糸の力が、イエイツの作品世界をより豊穡なものにしていると言える。

「塔」(“The Tower”)はその好例を示してくれる。この詩の第2部で、イエイツは自作の「レッドハンラハンの物語」(“Stories of Red Hanrahan”)を語り手に語らせている。「レッドハンラハンの物語」とは、『神秘の薔薇』(*The Secret Rose*)に収められた6編の物語のことを指す。<sup>1</sup> イエイツはその主人公レッドハンラハンを、18世紀に実在したゲール詩人、オーウェン・ロー・オサリバン (Owen Roe O’Sullivan) をモデルに作り出した。「塔」に関係しているのは、主にこの連作の第一作目「レッドハンラハン」(“Red Hanrahan”)である。まずは、この物語

---

<sup>1</sup> 第一作目は、元々は「悪魔の本」(“The Devil’s Book”)として『ナショナル・オブザーバー』*The National Observer* (1892年11月26日)に掲載された。後に「レッドハンラハン」として『神秘の薔薇』の中に入れられた時には、大幅な書き直しがされている。「悪魔の本」では、主人公の名前に「赤毛のオサリバン」(“O’Sullivan the Red”)が使われている。

を概説しておく必要があるだろう。物語の初め、ハンラハンは野外学校の校長として登場する。彼はサーウィン祭の前夜、ある小屋を訪れ、恋人のメアリー・ラベルからの伝言を受け取る。恋人の窮地を知ったハンラハン、彼女のもとへ急ごうとするが、その矢先、見知らぬ老人にトランプゲームに誘われる。その場にいた男たちも加わり、総勢 6 人でトランプをするのだが、トランプは老人によって一匹の兎と猟犬の群れに変えられ、小屋の外に飛び出していく。ハンラハン、老人に焚き付けられ、それらを追いかけて野原をさすらった末、輝く屋敷に案内され、妖精の女王と対面する。彼女は待ちくたびれた表情をしている。ハンラハン、彼女が何者なのか、そして何を待っているのかなどを尋ねようとするのだが、彼女の美しさや場の荘厳さに圧倒され、言葉を発することができない。彼女がため息をつくと同時に彼は意識を失い、その場に倒れるのであった。一年後のサーウィン祭前日に目覚めた彼は、すっかりその記憶を失っている。ようやくメアリー・ラベルのことを思い出して彼女のもとへと急ぐが、彼女が他の男と結婚して去ってしまったことを知るのである。

この物語の舞台はバリリー塔の周辺に設定されている。1913 年、イエイツは廃墟同然のこの塔を 35 ポンドで購入し、夏の間生活ができるように改築した。それ以降、塔は彼の多くの作品において重要なシンボルとなった。「塔」ではそのタイトルの通り、バリリー塔とその近辺に縁のある伝説や物語が語られる。ハンラハンの物語はそのひとつにすぎないが、そこで扱われる話の中では唯一イエイツの創作したものであり、特に重要な機能を果たしているように思える。本論では、「塔」におけるハンラハンの物語の役割を重視し、両作品の関係を考慮に入れながら、この詩の第 2 部の解釈を試みたい。まずは、第 2 部の語りを丁寧に読みながら、ハンラハンの物語がこの詩の中にどのよ

うに織り込まれているかを考えたい。そして、その考察をもとに、「塔」の中でハンラハンのことが語られる部分のある一行の解釈に関して、草稿と比較検討しながら、自分なりの見解を述べたい。

## 1.

「塔」は3部構成をしている。第1部では、イエイツを思わせる老詩人が、肉体の衰えに反してますます想像力が燃え上がる状態をどうすべきかと悩み、想像力を捨て、抽象的な事柄に喜びを見出すことが老いた身にふさわしいのではないかと自問する。第2部において語り手は、バリリー塔周辺になじみの深い伝説の者たちの記憶やイメージを呼び出す。ここでは、敵対者である農民の耳を贈られたフレンチ夫人、遍歴のゲール詩人ラフタリーと彼の歌で褒め称えられた田舎の美女メアリー・ハインズ、ハンラハン、バリリー塔の前居住者である破産した成り上がり者などについて次々と語られる。第3部において、語り手は、人間の創造力を高らかに歌い上げ、死を目前にしても歌い続けることによって心の平穏を得ようとする。大まかにまとめれば、第1部が問いかけ、第2部が答えに至るまでの試行錯誤の過程、第3部が決意表明という構成になっていると言えるだろう。

第2部の冒頭で、語り手は塔の屋上という高みに立ち、降霊術者のように、廃墟や老木から伝説の者たちのイメージや記憶を呼び出す。廃墟や老木は、彼の衰えた肉体や困窮した精神を表しているのだろう。語り手は、伝説の者たちに質問して死者の持つ知恵を借り、危機を打開しようとする。語り手の語りは冗長で、その口調自体が彼の混乱を表しているように思える。また、8スタンザに亘って延々と語られる4つの逸話は、最後の質問とは一見無関係なように思える。しかし、この無秩序な

独白には伏線が与えられており、それによって、彼の思考は徐々に結論へと導かれていく。

語り手は、伝説の者たちのことを語るうちに、自分の過去、特にモード・ゴンのことを間接的に思い出していくように思える。ハンラハンの直前に語られるラフタリーとメアリー・ハインズの逸話に注目したい。メアリーの崇拜者たちは、ある晩ラフタリーの作った歌に衝撃動かされて、彼女の姿をひと目見ようと彼女のもとに向かうのだが、そのうちの一人がクルーンの大沼で足を滑らせ溺れ死んでしまうのである。語り終わった後、語り手は次のように述べる。

Strange, but the man who made the song was blind;  
Yet, now I have considered it, I find  
That nothing strange; the tragedy began  
With Homer that was a blind man,  
And Helen has all living hearts betrayed.  
O may the moon and sunlight seem  
One inextricable beam,  
For if I triumph I must make men mad. (II 33-40) <sup>2</sup>

不思議なことだ、その歌を作った男は盲目だった。  
だがそれについてよく考えた今では、  
何も不思議に思わない。悲劇は  
盲目のホーマーで始まった。  
それ以来ヘレンは、すべての生ある心を惑わせてきたのだ。  
ああ、月と日の光が  
ひとつの分かちがたい光に見えますように。

---

<sup>2</sup> 本文中のイエイツの詩の引用はすべて、*W. B. Yeats: The Poems*. Ed. Daniel Albright (London: Everyman's Library, 1992) により、括弧内のローマ数字はセクション番号、アラビア数字は行数を表す。

というのも、もしうまくいけば、  
私もきっと男たちを狂わすにちがいないから。

ラフタリーの歌った美は、男たちを惑わせた。また、ホーマーは、トロイ戦争の元凶となった美女ヘレンを描いた。語り手は、ラフタリーもホーマーも盲目であったからこそ、想像力によって絶世の美女を思い描いたということに思い至るのである。しかし、ここでホーマーのことが話題に持ち出された理由は、他にも考えられる。ジョン・アンタレッカー (John Unterecker) も指摘するように、メアリーとラフタリー、ヘレンとホーマーという「絶世の美女と詩人」のペアが挙げられることによって、イエイツの作品中でしばしばヘレンに喩えられるモード・ゴンとイエイツ自身の関係が示唆されると言える (Unterecker 175)。このように、語り手の冗長なおしゃべりの言外にはモード・ゴンの存在がほのめかされるのである。

ハンラハンの物語は、語り手がモード・ゴンの記憶へさらに接近していくのに巧みに使われている。物語がどのように語られるのかということに着目することによって、語り手の心理プロセスを辿りたい。ラフタリーの話の最後、語り手は詩人として、現実 (“sunlight”) と想像力の持つ魔力 (“the moon”) を分かちがたく結びつかせ、人に両者を取り違えさせたいという望みを表明する。もちろん、この望みは、ラフタリーの歌が男たちの正気を奪った話を踏まえて述べられたものである。しかし、ここから「惑わせる者」と「惑わされる者」の関係は、「詩人」と「聴衆」から、「作者」と「作中人物」へと奇妙にすり変わっていくように思える。彼は、自分の作品の中で現実と幻想を取り違えた男を作り出したことを思い出すのである。

And I myself created Hanrahan

And drove him drunk or sober through the dawn  
From somewhere in the neighbouring cottages:  
Caught by an old man's juggleries  
He stumbled, tumbled, fumbled to and fro  
And had but broken knees for hire  
And horrible splendour of desire;  
I thought it all out twenty years ago: (II 41-48)

私自身もハンラハンを生み出し、  
夜明けの中で、彼を酔わせたりしらふにさせたりして  
近隣の小屋のどこかから追い立てた。  
ある老人の奇術にはまり、  
彼はつまずき、のたうち、まごまごして行ったり来たり。  
ご褒美に得たのは、ただ痛めたひざと  
欲望という恐ろしい輝き。  
私はこのこと全てを 20 年前に考え出したのだ。

ここで顕著なのは、「そして私自身もハンラハンを生み出し...」、  
「私はこのことすべてを 20 年前に考え出したのだ」と繰り返すことによって、語り手が創作者としての意識を前面に出しているということであろう。ハンラハンの災難を強調しているのも特徴的である。老人の奇術にはまったハンラハンは、「つまずき、のたうち、まごまごして行ったり来たり」するのである。また、「彼を酔わせたりしらふにさせたり」という表現から、語り手がハンラハンを意のまま操ったことが示される。さらに、「夜明けの中で」と時間を指定することによって、彼は月と日の“one inextricable beam”のもとでハンラハンを惑わせたことを主張しているように思える。要するに、彼は、自分もハンラハンを惑わせ悲劇を創ったことを主張しているのである。こ

のように、語り手は、自作のハンラハンの物語を自分の意図に添う形で再現していく。

語り手は、次の連で、物語の一場面—奇術師が兎と獵犬の幻を作り出す場面—を語り出す。おそらく彼は、ハンラハンが幻想を現実と取り違えるところを詳しく説明しようとして、この場面を取り上げるのだろう。だが、一旦語り始められた話は、彼の意図していたところから逸れていくように思える。

Good fellows shuffled cards in an old bawn;  
And when that ancient ruffian's turn was on  
He so bewitched the cards under his thumb  
That all but the one card became  
A pack of hounds and not a pack of cards,  
And that he changed into a hare.  
Hanrahan rose in frenzy there  
And followed up those baying creatures towards—

O towards I have forgotten what—enough! (II 49-57)

陽気な仲間が、古い囲いの中でトランプを切っていた。  
そして、あの老いた、ならず者の番がまわってきたとき、  
彼は親指の下でカードに魔法をかけたので  
トランプは一枚を除いてみな、  
一群れの獵犬になった。一組のトランプではなく。  
そして彼は、その一枚を兎に変えた。  
ハンラハンはそこで狂乱して立ち上がり、  
吠え立てる生き物についていき—

ああ、行き先は忘れてしまった—もうよい！



イエイツはなぜ語り手に話を中断させ、「忘れた」と言わせたのだろうか。「忘れた」という言葉は、先の長い物語に区切りをつけて、次の話題を持ち出すきっかけを与えるという機能を果たしている。しかしそれと同時に、この言葉は、読者に「レッドハンラハン」の物語の結末を思い起こすことを要求しているとも解釈できるだろう。元々の話では、この後ハンラハンが行き着く先は異界である。さらには、妖精の女王の前で怖気づいて言葉を発することができず、彼女を手に入れる機会を失い、異界から地上に戻され、メアリー・ラベルを失うという結末が待っている。物語の結末は、語り手に、彼自身がモード・ゴンという絶対美を求め続けて果敢な挑戦を繰り返したことや、手ひどい挫折を経験したことを思い出させるものである。<sup>3</sup> 語り手がハンラハンの物語の肝心な部分を思い出さないのは、自分自身の痛々しい過去の記憶と対峙するだけの準備がまだ不十分であることを示しているのであろう。

スタン・スミス (Stan Smith) が指摘するように、奇術師とハンラハンはどちらも語り手のペルソナであると言える (Smith 17)。そして、両者はハンラハンの話を語る途中で入れ替わるように思える。語り手は初め、自らをホーマーやラフタリーの系譜に位置づけるべく、ハンラハンを惑わせた話を切り出す。ここでの語り手の心理は、奇術を使ってハンラハンを操る老人と同化している。<sup>4</sup> しかし、語り手は、20年前に作り出した話を詳しく思い返すうちに、むしろハンラハンこそが彼の分身であったということをあやうく思い出しかけるのである。ハンラハンが兎と猟犬を追いかけて異界へと向かったように、

---

<sup>3</sup> ハリス (Daniel Harris) も、語り手がハンラハンの結末を「忘れた」と述べるのは、モード・ゴンを連想させるからだと考えている (Harris 190-191)。

<sup>4</sup> 初期のエッセイ「呪法」(“Magic”)において、イエイツが古代の詩人を魔術師のように見なしていることが連想される (44-45)。

若い頃のイエイツもモード・ゴンを追い求めた人物であったのだ。語り手は、ハンラハンの物語を語ることによって、徐々にモード・ゴンの記憶へ接近するのである。

このように、語り手の「忘れてしまった」という一言から、ハンラハンが女王と対峙する場面がモード・ゴンの記憶と結びついていることが示唆される。そして、これらの記憶は、第 2 部で延々と続く語り手の試行錯誤を終わらせるためには不可欠なものとして機能している。第 2 部の最後で、語り手は、ハンラハンに向かって次のように問いかける。

Does the imagination dwell the most  
Upon a woman won or woman lost?  
If on the lost, admit you turned aside  
From a great labyrinth out of pride,  
Cowardice, some silly over-subtle thought  
Or anything called conscience once;  
And that if memory recur, the sun's  
Under eclipse and the day blotted out. (II 97-104)

得た女と失った女、どちらにより一層  
想像力とはどまるのか？

もし失った女にいうのであれば、巨大な迷宮から  
顔を背けたことを認めよ。プライドのため、  
臆病のため、何らかの馬鹿げた過敏な思いのため、  
またはかつては良心と呼ばれたもののため。  
そして、記憶が心に浮かぶと、太陽は  
食に入り、昼は消されるのだと認めよ。

語り手は、ハンラハンに問いかけるという形で自分自身に問い

かけており、問い自体が答えとなっている。彼は、おそらく自分の記憶を重ねながら、「プライドのため、臆病のため、馬鹿げた過敏な思いのため、良心と呼ばれたもののため」、ハンラハンが女王の前で言葉を発することができなかったと指摘する。だがどのような理由であれ、言葉を発しないことによって、ハンラハンはこの世で満たされない欲望とともに歌い続ける運命を選んだとも言える。ここで語り手は、不可能なものを望む心や満たされることのない欲望こそ、詩人の想像力そして創造力の源泉となっていることに思い至るのである。最後の二行において、語り手は、「失った女」であるモード・ゴンにまつわる記憶を心に思い描くことによって理性をとばし（日蝕のイメージで表される）、想像力を取り戻す。

このように、ハンラハンの物語は「塔」の第2部で、語り手の思考を導くものとして効果的に機能している。語り手が、ハンラハンが妖精の女王の前で怖気づいて黙ってしまった場面を思い出すことと、第2部の最後で「失った女」であるモード・ゴンを思い出すことが、連動するよう構想されているのである。興味深いことに、この女王との対面の記憶は、元々の「レッドハンラハンの物語」においても重要な役割を果たしている。ハンラハンは異界からこの世へ戻ってきて目覚めた時、納屋を訪れたことも、奇術師とトランプをしたことも、妖精の女王に出会ったことも、すべて忘れてしまっている。「レッドハンラハン」の最後の場面で、彼の記憶喪失が妖精の仕業であることがほのめかされる（17）。しかし、「レッドハンラハンの物語」全編を通じて、ハンラハンは、徐々にその失われた記憶の断片を思い出ししていくようである。彼は、トランプを切るうちにメアリー・ラベルのことを思い出し（16）、海から生じた影のひとつから妖精の女王を思い起こす（30-31）。そして、年老いて死ぬ直前、妖精の女王に訊けなかった質問を思い出し、はっきりと口にする

るのである (70)。もちろん、「塔」の第 2 部においてハンラハンのことが語られるのは一部分にすぎず、両作品の関係のみを強調して無理に類似点を見出そうとすると、この詩の解釈を歪めてしまう危険性もあるだろう。しかし、「記憶」という観点から両作品を眺めたとき、これらの作品は、全体の構成において緩やかに重なっているように思えるのである。イエイツは、昔書いた作品を自らを思わせる語り手に記憶をもとに語らせるといふ枠組みを用いて、「レッドハンラハンの物語」を「塔」の中に巧みに織り込み、この詩の解釈を重層的にしていると言える。

## 2.

前章での考察をもとに、「塔」で語られるレッドハンラハンの物語の、ある一行の解釈について検討したい。語り手は、「陽気な仲間が古い囲いの中でトランプを切っていた」(“Good fellows shuffled cards in an old bawn”) という言葉で、ハンラハンが奇術師に操られる場面を語り始める。ここで、A・ノーマン・ジェファーズ (A. Norman Jeffares) は、行末の “bawn” を “barn” の誤植ではないかと指摘している (Jeffares 221)。確かに、この一行は、元の物語の筋とは異なる。「レッドハンラハン」の中では、ハンラハンは “barn” の中で、奇妙な老人と土地の男たちとトランプをしている時に、老人の魔術で幻影を見せられ、戸外へ飛び出してってしまうのである。一方、ダニエル・オルブライト (Daniel Albright) は、“bawn” に関して、ジェファーズのように誤植だとは断定していない。彼は元の「レッドハンラハンの物語」では、トランプが “barn” で行われていたことを指摘するとどめ、“bawn” とは「環状に囲われた塚」(“a ringed mound”) であるという注釈をつけている (Albright 636)。この一行をどのように解釈すべきであろうか。“bawn” を誤植だと考えるべきであろうか。

草稿を参照すると、<sup>5</sup> 元々は「田舎の男たちが古い納屋でトランプをしていた」(“That country men played cards in an old barn”)と書かれており、「レッドハンラハン」の筋により忠実であったと言える。しかし、稿を重ねるうちに、“That country men”は“Good fellows”に、“barn”は“bawn”に変更されている。後者の変更について草稿をさらに詳しく検討すると、元々は“barn”と書かれているが、その後書き直された段階では“bawn”と“bawn”の両方が見られる(但し、イエイツの筆跡が不明瞭であるため、編集者は“bawn”を不確定としている)。そして、さらにタイプライターで清書された稿では“bawn”とされている。この“barn”から“bawn”へと変更された理由には、どのような可能性が考えられるだろうか。確かに、手稿をタイプした者が打ち間違えて、そのまま直されなかったという誤植の可能性は捨てられない。しかし、イエイツは“bawn”とタイプされた原稿の上にさらに手を加えているため、誤植に気づかなかったという可能性は低いように思える。“barn”から“bawn”に変更されたこと自体に、理由があるとは考えられないだろうか。自分なりに解釈を示したい。

ジェファーズのような、“bawn”を“barn”の誤植の可能性があるという指摘は、元々の「レッドハンラハンの物語」の筋と異なるように解釈すべきではないということを根拠としているのだろう。しかし、そもそも、元々の物語の筋と厳密に照らし合わせて「塔」を読むということが正しい読み方であるとは限らないのではないかと。語り手は、20年前の自分の作品を一語一句正確に、順序立てて説明しているわけではない。例えば、元々の「レッドハンラハン」のトランプの場面において、奇術師は兎を出してから猟犬を出しているが(8-9)、「塔」において

---

<sup>5</sup> 草稿を検討する際には、主にイエイツの手書きの文字を編集者が活字にしたものを参考にした(*The Tower (1928): Manuscript Materials* 94-95, 120-121)。

語り手は、順序を逆にして語っている。また、先章で考察したように、彼は自分の都合に合わせて自作を思い出したり忘れたりしながら、物語を再構築しているのである。この詩の文脈と照らし合わせた時、この語り手の語り違いには理由があるとは考えられないだろうか。

ここで、“That country men” が “Good fellows” に変えられたことも視野に入りたい。 *The Oxford English Dictionary* の “fellow” の項によると、“Good fellows” とは、「陽気で社交的な仲間の一団」 (“a set of jolly or sociable companions”) を指す。しかし、妖精を連想させる言葉であるとも言えるのではないだろうか。<sup>6</sup> アイルランドでは、妖精を名指しで呼んで怒らせないために、「良い人々」 (“good people”) と呼ぶ。このことについてイエイツは、妖精のことを「とても怒りっぽいので、あまり彼らのことを語ってはいけないし、『紳士たち』 (“gentry”) とか『良い人たち』 (“good people”) を意味する『ディナ・マッハ』 (“daoine maithe”) という呼び名以外は口にしてはいけない」と述べている (*Writings* 8)。一方、“bawn” は、「要塞化された囲い」 (“a fortified enclosure”)、 「家畜の囲い」 (“a cattfold”) のことを指す (*O.E.D.*)。また、地方によっては、単に「農家に隣接した土地」 (“a farmyard”) や、「牛の乳搾りに使用するための家屋の近くの草地」 (“the green field near the homestead where cows are brought to be milked”) など指すにも使われるという (Joyce 214)。このように、“bawn” という語の指し示し得るものが多岐に亘るため、この行の “an old bawn” が、具体的に何を指し示すのか特定するのは難しい。だが、語の起

---

<sup>6</sup> この点について、第 228 会イエイツ研究会において、『アイルランド各地方の妖精譚と民話』 (*Fairy and Folk Tales of the Irish Peasantry*) に “good people” についての記述があることと併せて、佐野哲郎先生から貴重なご指摘をいただいた。

源を考慮に入れても、<sup>7</sup> 何らかの古い囲いのことか、あるいはその跡地のことを指すと解釈するのは間違いではないだろう。この言葉から、妖精が出没する場所について、イエイツが次のように説明していることが思い出されないだろうか：「アイルランドの至るところに堀り割りで囲まれた小さな野原があり、それは昔の要塞や羊を飼った囲いだと言われている。こうしたものが、円型土砦とか土砦とか、あるいは『王領』とか、さまざまに呼ばれている場所である」(『ケルト妖精物語』320)。このような場所では、妖精にいたずらをされたり連れ去られたりすると考えられた。また、『アイルランドの妖精譚と民話』(*Irish Fairy and Folk Tales*)においても、イエイツは、このような土地は古代ケルト人が自分の身と家畜を守るために防備を固め、石室を築いた場所であり、妖精たちがその跡を占拠したのだと説明している(344n)。“an old bawn”は、このような妖精と関係の深い場所のことを暗示し得るのではないか。もちろん、彼は「良い人々」(“good people”)、「円型土砦」(“rath”)、「土砦」(“fort”)といったような、直接的に妖精に関わる言葉を使っているわけではない。一義的には、“Good fellows”も“an old bawn”も、より一般的な意味で解釈すべきであろう。しかし、これらの言葉には、妖精の存在へのふくみが持たされているとは考えられないだろうか。2つの言葉が同時に使われることによって、裏に潜む意味合いが強められるように思える。

また、妖精とトランプという組み合わせにも着目したい。ホフマンは、妖精とトランプというモチーフが、イエイツが収集した民話の中に繰り返し現れることを指摘している(Hoffman 71)。イエイツの詩作品の中で、妖精とトランプゲームをすると

---

<sup>7</sup> “bawn”はアイルランド語の“badhum”が英語化された言葉であり、“badhum”は、「牛の囲い」(“a cow-keep”)を意味する“ba”と「囲い、または砦」(“a keep or fortress”)を意味する“dun”から派生したという(Joyce 214)。

いうモチーフが使われている有名なものは、ホフマンも挙げているように、花嫁さらいの話であろう。イエイツは、アイルランド西部の民話収集に熱中していた頃、スライゴーのバリソディアに住む女性にゲール語の詩を訳してもらい、「空の妖精群」(“The Host of the Air”) というバラッドに翻案している。また同じ話を散文で記録し、「人さらい」(“Kidnappers”) の中に収めている。「人さらい」は、オドリスコルという若者が帰路、湖の畔で、妖精たちが彼の新婚の花嫁ブリジッドを連れ帰るところに遭遇する場面から始まる。この話では、妖精たちは「陽気な一団」(“a jolly company”) と記述されており、オドリスコルは妖精たちのことを、「陽気な人間の団」(“a company of merry mortals”) だと思い違いをするのである (Writings 41)。このように、「人さらい」では、妖精たちを形容するのに “merry” や “jolly” という言葉が使われているのが目をひく。また、バラッドの「空の妖精群」においても、オドリスコルがトランプをする相手の3人の老人のことを「陽気な老人たち」(“the merry old men”; 29) と述べている。憶測の域を出ないが、イエイツが “Good fellows [...]” の一行を書いた時、この「トランプをする陽気な妖精たち」のことが、彼の頭をよぎったとは考えられないだろうか。

元々の「レッドハンラハン」において、奇術師の老人はおそらく妖精か妖精に近い者であり、トランプゲームはハンラハンを妖精の世界へと向かわせるきっかけとなる出来事である。「塔」においてそのトランプの場面で、妖精を示唆する言葉の組み合わせが使われているということが、偶然であるとは思えない。この詩の文脈において、妖精のことをほのめかすことに意味があるとは考えられないだろうか。ハンラハンのことを語る時、語り手は妖精に関することを一切思い出さない。妖精のことを言及しないばかりか、ハンラハンが兎と獵犬を追って行



き着いた妖精の世界のことも「忘れて」おり、妖精の女王との対面を思い起こすことを迂回しようとする。しかし、前章で見たように、語り手が、ハンラハンと女王の対面の場面を思い出すことこそが、第2部の試行錯誤に終止符を打つ鍵となっている。つまり語り手は、レッドハンラハンの話を語る時、思い出すべき部分を避けているのである。“Good fellows shuffled cards in an old bawn”という一行は、語り手が頭の片隅に追いやろうとしている妖精に関する記憶が、無意識のうちに彼の語りに影響していることを示唆しているのではないか。

第2部では、言葉の持つ多義性によって妖精のことがほのめかされる例が、他にも見られる。語り手は、第2部の最後でハンラハンのことを「奇術師がもの寂しい草地に送り出した赤毛の男」“The red man the juggler sent / Through God-forsaken meadows” (II 76-77) と呼びかける。ここでの“God-forsaken”とは、「(場所が) 人里離れた」という意味であろう。だが、文字通り「神に見捨てられた」という意味も重ねられているのではないか。妖精は、異教の神々が縮小した存在、または墮天使であり、最後の審判の際には消えてしまう存在であるという。<sup>8</sup> ハンラハンが奇術師に送り出された先が、妖精の国であったことを考え併せた時、“God-forsaken”という言葉が妖精の存在を暗示していると考えるのは無理のない解釈であるように思える。このように、イエイツは言葉の多義性を使って、語り手の背後で、彼が思い出すべき自作の物語の一場面のことを示唆しているのである。

---

8 イエイツは、妖精の起源として、異教の神トゥアハ・デ・ダナーン縮小説と墮天使説を挙げている (*Irish Fairy and Folk Tales* 1)。また、最後の審判に関しては、同書に収められている、T・クロフトン・クローカー(T. Crofton Croker) による「司祭の晩餐」(“The Priest's Supper”)を参照 (9-13)。この話では、妖精たちが司祭を晩餐に迎えた男に対して、最後の審判の際に自分たちの魂も救われるのか司祭に聞いてくれと頼む。

以上考察してきたように、“Good fellows”と“an old bawn”という語の組み合わせは、語り手が思い出すことを迂回している妖精の存在を示唆していると考えられないだろうか。イエイツの意図は定かではないが、草稿段階では元々の話に忠実な“*That country men played cards in an old barn*”が、最終的に“*Good fellows shuffled cards in an old bawn*”へ変えられたことによって、「塔」で語られるレッドハンラハンの物語は、はるかに示唆に富み、豊かな解釈を孕むように思える。

## 結び

本稿で考察してきたように、「レッドハンラハンの物語」は、「塔」の中でイエイツを思わせる語り手に語られることによって、巧みに取り入れられている。「塔」の第2部の、一見したところ気まぐれな語り口の背後にある、語り手の心理プロセスを完全に解明するのは難しい。しかし、ハンラハンの話をひとつの切り口として、その一端を推測することができる。即ち、自作の物語の中のハンラハンと妖精の女王の対面の場面を「忘れた」とする語り手の心理を探ることによって、第2部の決定的な質問に至るまでの伏線を捉えることができる。ハンラハンと女王との対面の場面を思い出し、モード・ゴンを思い出すことが、試行錯誤を終わらせる鍵となるように構想されているのである。また、決定的な瞬間を思い出していくという全体の構成においても、「レッドハンラハンの物語」と「塔」の第2部は、緩やかに重なっていると言える。

また、その考察を踏まえて、“*Good fellows shuffled cards in an old bawn*”という一行の解釈を草稿と比較しながら検討した。この一行は元々のレッドハンラハンの話とは異なるため、誤植であるとも考えられている。しかし、本論では、この元の話との相違には理由があるのではないかと考えた。ハンラハン

の物語を語る時、語り手は妖精の世界や女王のことを一切思い出そうとしない。“Good fellows” と “an old bawn” という言葉は、多義的に機能することによって、彼が思い出すべき記憶を示唆する役割を果たしていると解釈できるのではないか。

レッドハンラハンのことを周辺知識に位置づけて無視をしても、「塔」を読むことはできる。だが、この詩の第 2 部において、語り手が逸話を語り、答えを捻出するまでの過程のおもしろさは、元々の物語と照らし合わせることによって初めて十分に味わうことができると言える。イエイツは、この 2 つの作品を一本の糸で巧みにつなぐことによって、「塔」に豊かな解釈を与えているのである。

#### 引用文献

- Albright, Daniel, ed. and introd. *W. B. Yeats: The Poems*. London: Everyman's Library, 1992.
- “Bawn” Def.1. 2. *The Oxford English Dictionary*.
- “Fellow” Def. 3. *The Oxford English Dictionary*.
- Harris, Daniel A. *Yeats: Coole Park and Ballylee*. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1974.
- Hoffman, Daniel. *Barbarous Knowledge: Myth in the Poetry of Yeats, Graves, and Muir*. New York: Oxford UP, 1967.
- Jeffares, A. Norman. *A New Commentary on the Poems of W.B. Yeats*. London: Macmillan, 1984.
- Joyce, P.W. *English as We Speak It in Ireland*. 3rd ed. Dublin: The Talbot P, 1910.
- The Oxford English Dictionary*. 2nd. ed. 1989.
- Smith, Stan. “Porphyry's Cup: Yeats, Forgetfulness and the Narrative Order.” *Yeats Annual* 5 (1987): 15-45.

Unterecker, John. *A Reader's Guide to W.B. Yeats*. London: Thames and Hudson, 1959.

Yeats, W. B., ed. *Irish Fairy and Folk Tales*. New York: Modern Library, n.d.

---. *Stories of Red Hanrahan: The Secret Rose: Rosa Alchemica*. London: A.H. Bullen, 1913.

---. *The Tower (1928): Manuscript Materials*. Ed. Richard. J. Finneran, Jared Curtis, and Ann Saddlemeyer. Ithaca: Cornell UP, 2007.

---. *Writings on Irish Folklore, Legend and Myth*. Ed. Robert Welch. London: Penguin Books, 1993.

イエイツ（ウィリアム・バトラー）編著 井村君江編訳 『ケルト妖精物語』第11刷 筑摩書房 1990年.

--- 著「呪法」鈴木弘訳『善悪の観念』金星堂 1924年 25-54頁.